

『雪橋詩話』に見る黄道周像

河内利治

一 問題点の所在

清末民国初の楊鍾羲（字は芷晴、号は雪橋、一八六五—一九四〇）が著した『雪橋詩話』は、初集十二卷・続集八卷・三集十二卷・余集八卷の全四十卷からなる。本書の特色を総括すると次の五点に集約される。^(注1)

①清代の掌故（歴史上の人物の事跡や制度沿革・故実）を記述した書物である点

詩話と名づけられているが、実際の内容は、清朝の制度典章を記載し、上は朝政国故・朝廷儀礼・官制沿革・科挙試験・財政税収・河川ダム・兵馬運送から、下は民俗風情・農林生産・各特産品・自然風土・天文地理・旧聞軼事・学術淵源・芸文流派まで、極めて広範囲に及び、歴代の詩話のような単に詩の評論に留まるものではない。『雪橋詩話』初集所収の諸家の序跋は、おおむねこのように評価しており、版本目録学の大家、繆荃孫の「雪橋詩話序」はその代表的な一文である（括弧内は筆者の補注）。

国朝（清朝）の文人、経学・史学は均しく明人の上に超出するも、独り一朝の掌故の学に至りては、明人に如かず遠きこと甚だしく、鄭端簡（暉）・王弇州（世貞）は固より其の人無く、即ち記載匯編の書、金声玉振の集は、国朝も亦た有る無きなり。史館の実録は、日を逐って排比し、諭旨は首尾無く、断制無く、大臣の列伝を附せず、宋・明の実録と同じからず。起居注も亦た同じく、更に完備せず。〔中略〕私家の著述の最も翔実たる者は、錢衍石（儀吉）

の『碑伝集』・王文勤（慶雲）の『石渠余記』・呉制府（振域）の『養吉齋叢録』なるのみ。楊芷晴太守、上海に同寓し、一日、『雪橋詩話』十二巻を以て見示す。首より尾まで、読むこと十日にして畢え、曰く「此れは詩話と名づくると雖も、固より国朝の掌故の書なり。採詩より事実及び、事実より制度を詳らかにし、典礼を詳らかにし、名大家を略し、山林の隱逸を詳らかにし、尤も満洲を詳らかにし、直ちに劉京叔（祁）の『帰潜志』・元遺山（好問）の『中州集』と相い埒し。即ち其の論詩は、国初の朱（彝尊）・王（士禎）・葉（燮）・沈（德潜）を推し重んじ、悉く正声を取り、而して甚だしくは袁（枚）・蔣（士銓）・趙（翼）の流派を揚げず、郢説歧涂は、掃除して浄尽し、詩学においても亦た甚だしく裨益する有り」と。（中略）甲寅（一九一四年）暮春、江陰の繆荃孫序す。

②清代詩歌を論述した専著と言える性格を具備する点

本書は清詩の源流・発展・変化に対する分析が系統的で明晰で、渉獵する人物は一万人以上を数え、清代文学を研究する者にとって豊富で価値ある資料を提供する。前述の繆荃孫の序文には「清初の朱彝尊・王士禎・葉燮・沈德潜を推し重んじ、袁枚・蔣士銓・趙翼の流派を取り上げない」とあるが、朱王らを重んじるものの、袁枚らの作品を決して単に否定するものではない。本書は異なる流派の詩を論じる観点について、客観的で公平な立場を取っている。

③明代の遺民の作品が大量に記載されている点

作者の楊鍾羲は、辛亥革命以後、上海に寓居し世の出来事を問わず、清朝の遺民として生きた。明代の遺民の作品が大量に記載されている理由は、明になぞらえて清を述べ、自己の懐旧の感を抒発しようとしたからであると思われる。よって、経伝には名前が見当たらない多くの遺民や高士の作品、事跡が記述されるのである。しかし、極めて保守的な立場から出発して戊戌変法や辛亥革命を非難したり、明代の遺民の事跡に借りて、彼が辛亥革命以後、暗に清朝遺老としての政治思想を堅持する態度を宣揚しようとした点は、やはり客観性に欠けると言わざるをえまい（傍点筆者）。

④八旗（清朝満洲民族の兵籍と戸籍の編成制度）出身の大家の作品が収録される点

作者の楊鍾羲は、先祖が満洲正黄旗に隸属するという家柄に生まれたこともあって、生涯をかけて八旗の文献を捜し

集めた。本書には納蘭性徳・法式善・常安・李鐸・鉄保・英廉など八旗出身の大家の作品が収録されている。

⑤北京の風土史料が保存されている点

書名の『雪橋詩話』は、先祖代々北京に居住して墓地が良郷にあり、宋末の文天祥が北行してここに来て、「雪橋琉璃橋を過ぎる詩」を作ったことに由来する。

筆者が、この五点の特色の中で特に着目したのは、第三点目である。つまり、彼が辛亥革命以後、暗に清朝遺老としての政治思想を堅持する態度を宣揚するために、どのように明代遺民の事跡に借りたかの点である。この点を考察するために、小論では明末清初の文人黄道周（諡号は忠端、石齋先生と称される、福建漳浦の人、一五八五～一六四六）に焦点を当て、黄道周という人物を『雪橋詩話』がどのように記述（引用を含む）しているかを検討することにする。延いては、清末民国初の文芸界における黄道周像をも浮きあがらせてみたい。^(注2)

二 「雪橋詩話」に見える黄道周に関する記述

『雪橋詩話』四集四十巻中、黄道周に関する記述は全部で19条見られる（1～19の番号は筆者が付した便宜的な数字、巻数とページ数は標点索引本『雪橋詩話』遼瀋書社出版一九九一年六月第一版のものである）。先ずは原文を鈔録する（一）は原文の割り注、（二）は原文より補った字句である。第三節・第四節の訓読も同じ）。

1 『雪橋詩話』巻一・八頁下～九頁上

徐昭法、名枋、號俟齋、少詹事文靖公汧長子。崇禎壬午舉人。乙酉、文靖殉節止水、欲從死。文靖曰「吾不可以不死。若長、爲農夫以歿世可也」。是歲避地汾湖、已而遷蘆墟。黄石齋於丙戌薦俟齋、貽書臥子、招之入閩。臥子亦欲俟齋參其軍、皆力辭。以爲諸公不過因先人之大節而及貌孤、是昔人所云「因以爲利者故不敢、若安危得喪、非所斤斤也」。

2 『雪橋詩話』巻一・一八頁上～下

徐處士宏澤以詩畫名。萬曆中、與李少卿日華・陳徵士繼儒聲相埒。有『竹浪齋集』。子柏齡節之、崇禎三年舉人。座主

爲黃石齋。石齋以言事獲罪、出至杭州、愛大滌山。治精舍、著書講學。甲申以後、忠節則慈谿劉振之、錢塘姚希允、經術則海寧袁朝瑛、仁和孟應春、餘姚何瑞圖、書法則嘉興汪挺。節之以詩畫頡頏其間。石齋贈以詩云「節之貽我詩、十章大清脫」。石齋殉國、節之秉師訓、始終不渝其節、與其子燦心、三世皆善詩畫、論者以爲難。

3 『雪橋詩話』卷一·三六頁上

王崑繩孤忠遺翰序云「武林陸鯤庭先生乙酉死於難。留書辭其母及兄弟。其兄麗京先生集一時南北殉難如倪鴻寶、陳木叔、黃石齋諸君子平昔往還書牘、贈答詩、古文、裝潢成卷、而附其書於後、題曰『孤忠遺翰藏之』。後麗京先生亦遂棄家、長往不返、其子寅尋之十餘年不得遇。丙寅夏、寅遇源於京師、出其卷示源、使源爲之序」。

4 『雪橋詩話』卷二·五五頁下

閻百詩先世居太原縣西寨邨。六世祖始遷山陽、故晚取『爾雅』晉有潛邱語以自號。父修齡、字再彭、號牛叟。少師事黃石齋、平生慎檢持、以詩名江淮間。甲申、棄諸生。與張虞山養重、靳茶坡應昇、嘗同作秋心詩。虞山爲作丹荔老人傳。母丁、名仙窈、字少姜、亦能詩、自題讀書處曰『兌閣』。以兌爲少女、己於女兄弟中、行最少也。

5 『雪橋詩話』卷七·二二六頁下

〔詒晉齋〕題「黃石齋弔周中丞詩卷」云「芒屨野店繞風塵、絕學孤忠共致身。〔石齋〕還山詩」有「不知野店芒屨者、曾過玉皇香案來」之句。輔嗣談經無後輩、景純推命竟斯人。〔石齋有〕『三易洞璣』、其殉難、符自推之數。〔臣心慘惻懷屠狗、國事倉皇到泣麟。〔見石齋〕『前緩聲歌』。〕哭友遺篇關厄運、他時買筆過亡秦」。

6 『雪橋詩話續集』卷一·四五二頁上

程穆倩當明崇禎時、已爲黃石齋諸公所重、取友甚嚴。馬·阮爲東林所擯斥、數招致、穆倩始終落落莫與合。王文簡治春詩云「白嶽黃山兩逸民」。謂穆倩與孫默無言也。

7 『雪橋詩話續集』卷四·六二二頁下、六二二頁上

漳浦黃石齋先生責躬詩、「草草一世問、遂爲稊與秕」。又云「浮雲不可刊、月華爲之虧」。公在戊、蔡玉卿夫人石潤嘗寫心經百卷。及臨難、夫人寄書勉以致命遂志。沒後、家人得其小冊、自謂終于丙戌、年六十二、始信其能知來。夫人雜花

畫冊、作于崇禎丙子、正公居家爲民之時。未幾、召復中允。花卉十種、工緻生動。每幅有四言題句、末款云「石道人命石潤蔡氏寫」。字端勁、不類婦人。藏石耕唐氏、後歸小山堂趙氏。乾隆己巳、柘坡觀于梁文莊清勤堂。作詩云「東宮學士辭青綈、海濱自侶魚與蝦。學堂斷斷靜不譁、洞璣一部沈疴瘥。濟陽淑儷美且姘、閒居翫物耽卉葩。手調素粉研赤砂、十指拂拂抽靈芽。蚤風蠻雨浥注嘉、厥感土物先漳茶。緋桃成畦粲若霞、將離鄭俗祛淫哇。當歸蔓菁思馮牙、米囊不羨鳴連枷。小草細碎尤扶爬、莖條婀娜根鬚髻。月季末幅意更遐、兩族合并長春花。〔自蚤風蠻雨至此、多彙括所題語。〕何來鶴書鸞鳳宜、彤管遠不攜徵車。〔公「劾陳新甲疏」云「巨年踰五十、非有妻子之奉、婢僕之累」。〕尋依戍籍燒荒畚、香鑪茗盃天之涯。滄桑復變旋漢槎、龜茲小國讒波遮。市人驅戰蓬雜麻、扁擔一旅蟲為沙。徒然賭墅野客嗟、捉鼻那似東山家。〔賭墅渾如昨、歌鐘杳未期。何雲傷黃相國詩也。〕天留正氣永不邪、零星十幅依雙髻。茂漪筆陣鈿莫鄣、忠惠家法非塗鴉。心經百卷世更誇、惜久零落涎蟲蝸。今得對此如靈蛇、寶守敢不文綈加。世間紅紫粉土苴、令人惆悵譏春華」。

8 『雪橋詩話三集』卷一・八二一頁下

海寧沈天目、崇禎壬午、授漳浦令。福藩南建、鄭芝龍擁兵跋扈、遣裨將徵餉於漳。罵擲其檄、不顧、劾罷去。黄石齋賦詩贈行云「矚石愚溪各小山、但無芝草媿商顏。數行鳥跡沙田外、一幅漁蓑風雨間。世道自隨人變化、野花聊與竹爛斑。不堪垂老看新麻、賴爾巾車數往還」。天目別石齋先生詩、有「何人敢罵平原坐、百藥難醫屈子窮」之句。本朝以大理寺評事徵、不起、築老圃堂終隱焉。

9 『雪橋詩話三集』卷一・八四一頁下

莆田林衡者佳璣、十六補諸生、好言王伯大略。謁黄石齋於榕壇、抗聲長揖曰「天下以文章忠孝望先生。然王祥何曾救魏晉之敗、寧武子不能止晉醫之鳩、張華博物徒虛語耳。世之所望者、佳璣不以爲然、佳璣所望者、文章忠孝之外也」。石齋爲申仁義之旨、折節受教。將歸、石齋贈詩有云「但道一邱吾自足、應分半畝與君居」。其見重如此。乙酉後、絕意科舉、有返自南山詠述四十韻。漫興句云「怪來爭佩宜男草、自有佳人不嫁人」。遇雖窮、然自喜不悔。陳言夏亟稱其人。

10 『雪橋詩話三集』卷三・八九〇頁下

〔冥子孟舉〕嘗謂黄石齋書法不入中品、獄中所寫孝經、道緊整肅、忠孝之氣鬱然、眞天地至寶。有「臧弃石齋眞蹟在、不

緣書法也流傳」之句。

11 『雪橋詩話三集』卷四·九二二頁上

〔黃莘田〕又云「我祖中允公、著述鮮匹儔。劫灰半磨滅、什一遺先疇」。〔莘田祖中允、曾令山陽。中允文集皆准上諸公所梓、遺集未刊者尚多。中允藏書處曰『環翠樓』。以黃石齋先生黨禍同下詔獄、石齋貽中允詩云「心可知無怨、途窮未倒行。陰晴隨小鳥、毒痛共蒼生。故事經開眼、留人別點睛。江河終日計、豈有不澄清」。又一章云「癯遜無清嘯、通途得雅春。舊冠誰合度、扁帶若爲容。蹙國看元兔、游師恣赤松。驚心非一事、旦晚又秋蛩」。〕

12 『雪橋詩話三集』卷十·一〇九九頁下

杜戡陽和詩三首云「德人朱太傅、幽韻眼同青。噬虎驚撞斗、扶鸞響應瓴」。〔太傅戲書一詩、焚之獨室、黃石齋先生降卧嘉興錄示於人、一字不錯。〕

13 『雪橋詩話三集』卷十二·一一七九頁上

宗湘文兵備爲家簡侯先生舊交、部署其未了最周至。藏有勝國三忠墨蹟、倪鴻寶手札二通、：黃石齋泥金箋行楷一通、瞿稼軒手札一通。孫琴西太僕題云「積牆標運那能支、人物瑰奇尚可思。慟哭俊厨猶抗論、崎嶇梁益已非時。百年喬木遺哀鳳、十幅明珠摘睡驪。太息元成肩漢業、幾人溫籍號經師」。秦澹如爲賦七古一首、高伯平·馮鐵華各有題句。

14 『雪橋詩話餘集』卷一·一二二四頁上〔下

龍溪洪阿士、名思、黃石齋先生高弟。先生招征遂志、阿士乃移雞犬入竹川。著洪圖十二書、以誨其子、不知有人間事也。晚年稍客授四方、收石齋遺文。康熙甲申八月卒於漳之行窩、門人執喪於紫雲山、各爲詩以哀之。林子牛哀竹川二章云「非不堅虛谷、其如道未行。蓬頭五十載、匿跡半孤城。老至心仍苦、時危志益明。可憐濱死日、猶注齋騷成」。〔已矣斯文喪、千行淚不禁。著書遺典籍、孤塚碎人琴。薇蕨猶終古、衣冠無復今。西臺雲正暮、誰續楚歌音〕。嘗於苦竹山建博濟祠、以祀石齋。子牛遯亡詩、稱其「半生匿跡、一意洪圖。志之所尚、不負師門」。著有石秋子錄、故又稱洪石秋。

15 『雪橋詩話餘集』卷六·一四三〇頁下

戴金溪司寇有花游曲、集東坡句一百二十首、自注引漳浦黃忠端攬錢蟄庵詩曰「詩甚可觀、然其中有贈女校書作、近來

此等習氣、皆元規之塵也。」

16 『雪橋詩話餘集』卷六・一四四一頁上(下)

湯狷庵有鄭峯陽庶常冤獄辨五篇、謂「峯陽與黄石齋・文湛持稱石交。天啓二年、湛持疏刺客魏、留中不發。鄭即繼之、幾罹不測。賴福清・蒲州兩相力救而免、奪職爲民。峯陽杖母之獄、發難者温體仁。體仁既去、其事漸緩、而張至發・楊嗣昌揚其波。體仁欲傾湛持、不得不剪除其羽翼。鄭又出言不遜、逢彼之怒。至發・嗣昌欲傾石齋、鍛鍊成之。石齋與嗣昌廷辯於前、復爲作墓誌於後。石齋非可欺之人、峯陽亦決無杖母之事。峯陽父太初與楊氏爭屋成隙、崇祀乩仙、皆召禍之道。峯陽恃才傲物、見忌鄉里、官僅庶常、而建言起用、資望已深、故體仁借杖母以阻之。許曦輩爲放鄭小史、妝點聳聽、永叔帷房之謗、文山匿服之譏、貝錦一成、不殺不止。孫淇澳不妄交、著困思鈔・慎獨義諸書、獨與峯陽商榷。果如委巷流傳之說、則淇澳比鄰、豈獨不知。峯陽被逮之時、正淇澳病篤之際、又何疑其不救。石齋・念臺・梨洲主持清議、爲之訟冤。張紹秋輩與鄭素無德怨、但據風聞不復核實。顧寧人亦復聽人言、作詩譏刺。因作鄭案傳信錄以存其真」。朱石君爲狷庵尊人門下士、其答石君並柬令兄竹君詩有云「醜儒審行藏、尤欲慎語默。匪徒競浮名、斂華就其實。惜哉天山翁、登朝大慙直。一斥不少挫、抵掌奸相側。奸相詎相容、力奮含沙惑。大獄突然興、厚誣伏波蕙。黨惡漸盈廷、奚啻虎而翼。遂令服上刑、肢解同怪鱗。當時盡骨驚、異代猶心盡。可怪汲古家、罕能得要櫛」。亦爲峯陽事而發。所著賴古齋詩文、張宛鄰爲之校刊、其女夫也。

17 『雪橋詩話餘集』卷六・一四六〇頁下

鄧元昭贈王茂衍詩稱年丈、實丁亥同年。黄石齋與喬柘田天啓壬戌同年進士、石齋與柘田手簡稱爲年兄。徐虹亭與潘次耕尺牘稱次耕年兄、以同舉鴻博也。

18 『雪橋詩話餘集』卷六・一四六九頁下

寶山沈學淵夢塘：有詩數十首。漳州云「：逃雨巖荒舊講堂、從無錦字怨朝陽。春船一卷簪花格、寫盡全家鐵石腸」。〔逃雨巖在鄴山、黄石齋先生講學處。夫人蔡潤石玉卿、當先生督師出杉關時、致札云「自古忠貞、不煩內顧、身後之事、玉卿圖之」。善書。代先生作行草、幾奪真。嘗偕北上舟中臨衛夫人帖。人爭以匹錦購之、然皆署石齋名。晚年乃或自署。〕

19 『雪橋詩話餘集』卷七・一四九三頁下

宣宗召對、有「誠實不欺」及「公正忠誠」之褒。漳浦黃忠端從祀東廡、公所奏請也。(姚)石甫稱其平生大節凜然、朝望比之壁立千仞。觀察惠潮時、蓋嘗在其幕中。

以上の19条の要旨をそれぞれまとめると次のようになる。

- 1…徐枋が黃道周や陳子龍からの反清起義の参加を断り遺民となった話。
- 2…詩画で有名な徐宏沢の子、徐柏齡が師黃道周の教え守った話。
- 3…陸麗京先生が倪鴻宝、陳木叔、黃石齋等の諸君子の手紙、贈答詩、古文を集め『孤忠遺翰』巻と題して収蔵した話。
- 4…閻若璩の父、閻修齡が若いころ黃石齋に師事した話。
- 5…成親王が「黃石齋の周中丞を弔ふの詩巻」に題した話。
- 6…黃石齋ら諸公が重んじた程邃の話。
- 7…黃石齋先生の「責躬詩」と夫人蔡玉卿の『心經百卷』と『雜画画冊』について。
- 8…黃石齋の「海寧の沈天目に贈る詩」について。
- 9…林佳璣が黃石齋に榕壇で謁見した話。
- 10…吳孟拳の黃石齋の書法に対する見解。
- 11…黃石齋の「黃中允に貽る詩二首」について。
- 12…黃石齋が卧を嘉興に降し人に示すに一字も間違わなかった話。
- 13…孫衣言題の『勝国三忠墨蹟』(倪鴻宝・黃石齋・瞿稼軒)について。
- 14…黃石齋の高弟、洪思の話。
- 15…黃忠端の「錢蟄庵に推するの詩」について。
- 16…鄭鄭の獄について。
- 17…呼称について。

18…黄石齋が夫人蔡玉卿に贈った手紙と書について。
19…黄忠端の大節凜然について。

この19条に見える黄道周像を、その内容から整理すると次のようになる。
黄道周について直接述べるもの、

a 黄道周の人間性…12 (逸話) 19 (大節)

b 黄道周の詩…5・7・8・11・15

c 黄道周の書…3・10・13

間接的に黄道周の交友関係に関して述べたもの、

d 友人…1 (徐枋)・6 (程邃)・9 (林佳璣)・16 (鄭鄞)

e 弟子…2 (徐柏齡)・4 (閻修齡)・14 (洪思)

f 夫人蔡玉卿…7 (書画)・18 (手紙と書)

その他、

g 無関係…17

に分けられる。

三 「雪橋詩話」に見る黄道周像

それでは、このa～gの分類を基礎に、次のように時代区分し、時代順に黄道周像をみてみよう。数字は第二節の原文の番号である。なお3・10・13および7・18については、第四節に後述するが、12・15については不明な箇所があり、また17は黄道周像と内容的に無関係なので割愛する。

(I) 明朝末期 (天啓・崇禎) …9・6・7・16・11・4

- (II) 明朝崩壊前後(甲申の変) : 1・2・8
 (III) 清朝初期(順治・康熙・雍正・乾隆) : 14・5
 (IV) 清朝中期(嘉慶・道光) : 19

(I) 明朝末期(天啓・崇禎)

先ず9の文章を読んでみる。この一文には、黄道周の門人林佳璣が、若い頃に文章忠孝の士たる黄道周に対してくつてかかった気骨ぶりと、明朝崩壊後に遺民の道を選んだことが述べられている。

莆田の林衡者(名は)佳璣は、十六にして諸生に補せられ、好んで王伯の大略を言ふ。黄石齋(道周)に榕壇に謁し、抗声長揖して曰く「天下は文章忠孝を以て先生を望む。然れども王祥は何ぞ曾て魏晋の敗を救ひ、甯ぞ武子は晋医の鳩を止むる能はず、張華の博物は徒らに虚語なるのみ。世の望む所の者は、佳璣以て然りと爲さず、佳璣の望む所の者は、文章忠孝の外なり」と。石齋為に仁義の旨を申し、節を折り教えを受く。将に帰らんとするに、石齋、詩を贈りて「但だ道は一邱あらば吾れ自ら足り、応に半畝を分かち君と居るべし」と云ふ有り。其の重んぜらるること此の如し。乙酉(一六四五年)の後、科挙を絶意し、南山自ら返る詠述四十韻有り。漫興の句に云く「怪来佩を争ひ宜しく男草なるべし、自ら佳人の人に嫁がざる有り」と。遇たまたま窮すと雖も、然して自ら喜び悔ひず。陳言夏亟めて其の人を称す。

林佳璣については、『小腆紀伝』巻二十四に「林眉の従子佳璣、字は衡者は、質樸にして志行を修め、詩文は世其の家法を能くす」とあり、錢仲聯主編『清詩紀事』『明遺民卷』に「林佳璣、字は衡者、福建莆田の人」、「興化の林衡者は布衣芒屨もて、其の詩古文詞十数巻を負ひ、入門し長揖して曰く『吾れは石齋の弟子なり。先生没すれば、吾が党は其の經書を抱き、巖谷に逃匿し、蓋し天下と与に絶たん』と」(吳偉業「送林衡者還閩序」)、「林衡者は、莆田の人なり。少くして黄忠烈(道周)の門に遊ぶ。著はす所の詩古文詞数十巻あり。詩は蒼渾深秀にして、古文は雅健にして法有り」(梅村詩話)とある。ところで黄道周は、崇禎五年(壬申、一六三二)に、北京より休官して故郷の漳浦に帰り、後学の指導に当っ

た。二年後、崇禎七年の夏五月より八年の冬十月まで、紫陽学堂を正式の講学舎として、天文・地理・經史から百家の説にいたるまで講学した。文中の「榕壇」はこの紫陽学堂を指す。「王祥」は晋代の二十四孝の一人、「武子」は春秋の晋の武公、「鳩」は鳩羽を浸した毒酒、「張華の博物」は晋の張華撰『博物志』のこと。

次の6の一文には、黄道周が重んじた程邃の人間性が語られている。

程穆情は明の崇禎の時に当り、已に黄石齋ら諸公の重んずる所と為り、友を取ること甚だ厳し。馬(士英)・阮(大鍼)は東林の擯斥する所と為り、数(しばしば)招致するも、穆情は始終落落として与に合すること莫し。王文簡(名は士禎)の「冶春詩」に云ふ「白嶽黄山の両逸民」とは、穆情と孫黙無言を謂ふなり。

程穆情(一六〇五〜一六九二)の名は邃、安徽歙県の人で、明の諸生。金石考証に長じ、篆刻に精通しまた詩画に巧みで、著に『会心吟』がある。孫黙(二六一三〜一六七八)は、字は無言、安徽休寧の人である。王士禎(諡号は文簡、一六三四〜一七二二)の「冶春詩」とは「冶春絶句」十二首を指す。^(注3)張慧劍編著『明清江蘇文人年表』に拠れば、一六四〇年の項に「安徽の程邃は姜垓を助け、阮大鍼の名を削除するの疏稿起草す」(『古文彙鈔』一一二)とあり、一六四二年の項に「福建の黄道周、南京に在りて、安徽の程邃・江寧の白夢鼎(醒庵)・白夢鼎(蝶庵)等と会す」(『国朝金陵詩徵』五)とある。また震鈞『国朝書人輯略』卷一「程邃」が引く清の郭棻『学源堂集』には「穆情は明の(天)啓(崇)禎の時に当り、已に奕奕然として、自ら世に命づ。故に漳海の石斎黄公、澄江の機部楊公(廷麟)、及び江左の数大君子の深く交はらざる靡く、而して雅に之を重んず。然して卒に一に賢良の詔に応じて幕志の識に入制するを肯んぜず。蓋し独絶なる者有り。其の諸公との酬倡往復の什を觀なば、其の人概ね觀るべきなり。或ひと曰く、穆情は友を取ること甚だ厳し。阮大鍼・馬士英並びて東林の擯斥する所と為り、二人は世に数(しばしば)穆情を招致するを容る所無きを悵む。穆情始終落落として、卒に与に合する莫し」とあり、同じく引く『画舫録』には「隸書を工にし、品行端慤にして、敦く氣節を崇ぶ。早く漳浦の黄道周に従ひて遊び、晩年は江都に居す。王文簡の冶春詩に云く、白嶽黄山の両逸民は、即ち邃と孫黙を謂ふなり」とある。思うに楊鍾羲は『学源堂集』および『画舫録』より本文を構成したのではなからうか。いずれにせよ本文は、程邃の人間性を称えた文章であり、その証拠に黄道周と交友したことを利用したとも考えられる。

陳思王曹植に四言詩「躬を責むる詩一首」(『文選』卷二十)があり、それは、みずからの地位を頼んで犯した大きな罪を深く恥じつつ告白し、その償いの決意を表明して兄の文帝へのひそやかな愛情を綴った沈痛な詩である。黄道周がこれを意識して作詩したと思われるのが、7が引く「躬を責むる詩」である。それは『黄漳浦集』卷三十七・五言古詩「責躬六章」を指し、其の第二首はこうである。

姫孔亦勞人、心緯何其微。馳驅道路間、研慮精且希。雖非耳目功、觸緒知所歸。

大者接星辰、細者呼風雷。安有蟠首年、棄身忽如違。浮雲不可刪、日華爲之虧。

『雪橋詩話』が引くのは最後の二句であるが、「刪」を「刊」に、「日」を「月」に作っている。表面上は「空に浮かぶ雲は削り取れず、日の光はそれ自体によって減少する」と言う意であるが、「浮雲」が小人を、「日華」が皇帝の威光を指す意を寓すと解すると、「小人どもは撃退できず、崇禎帝の威光は衰えた」となる。また其の第八首はこうである。

好道不入微、閱物不至細。影響自相答、杳然無所繫。大易重存身、春秋本大義。

詩人多微思、委宛出至意。草草一世間、遂爲稊與秕。江漢下明河、忽已失所持。

『雪橋詩話』が引くのは第9・10句目で、「この世にひとたび受けた生は慌ただしく過ぎ去り、稊(ひえ)や秕(しいな)のようにつまらぬものとなった」と言う。この一首は陳田の『明詩紀事』辛籤・卷四にも収録されている。この「躬を責むる詩」の制作年代は、黄道周が自ら己の過ちを責めた詩であることや、『雪橋詩話』の原文から推して、崇禎末のことかと思われる。

16の文章は、明末政治史上、非常に有名な事件「鄭鄩の獄」についてである。計六奇の『明季北略』に言うところの「鄭鄩本末」(卷十五所収)である。長文であるが注を加えつつ訓読する。

湯狷庵(湯修業、一七三〇〜一八〇〇)に「鄭峯陽庶常冤獄辨五篇」有り、謂く「峯陽(鄭鄩、一五九四〜一六三九)と黄石齋、文湛持(文震孟、一五七四〜一六三六)は石交と称す。天啓二年(一六二二)、湛持は疏して客魏(魏忠賢、?〜一六二七)を刺すも、中に留められて発せず、鄭即ち之を継ぎ、幾の雇ひなるか測らず。福清、蒲州の両相の力めて救ふを頼み而して免かるるもの、職を奪はれ民と爲る。峯陽の杖母の獄、難を発せし者は温体仁(字は長卿、?〜一

六三八)なり。体仁既に去り、其の事漸く緩むに、而して張至癸(字は聖鶴、?一六四二)、楊嗣昌(字は子微、一五八八一六四二)其の波を揚ぐ。体仁は湛持を傾けんと欲し、其の羽翼を翦り除かざるを得ず。鄭又た言を出だして不遜、彼の怒りに逢ふ。至癸、嗣昌は石斎を傾けんと欲し、鍛錬し之を成す。石斎と嗣昌は前には廷弁し、復た後には墓誌を作り為す。石斎は欺く可き非ざるの人、崋陽も亦た決して杖母の事無し。崋陽の父太初は楊氏と屋を争ひ隙を成し、祀を崇び仙を^{うづな}乱ひ、皆禍の道を召く。崋陽は才を待み物を傲り、郷里に^{きらい}忌はれ、官僅かに庶常なるに、而して起用を建言し、資望は已に深く、故に体仁は杖母を借りて以て之を阻む。許曦輩は『放鄭小史』を為り、妝点聳聴し、永叔(歐陽修)の帷房の謗、文山(文天祥)の匿服の譏、貝錦一たび成り、殺さずんば止めず。孫淇澳(孫慎行、鄭鄭の舅、一五六四一六三五)は妄りに交はらず、『困思鈔』、『慎独義』諸書を著はし、独り崋陽と商榷す。果して委巷流伝の説が如きは、則ち淇澳の比鄰、豈に独り知らざるや。崋陽逮せらるるの時、正に淇澳は病篤の際にして、又た何んぞ其の救はざるを疑はん。石斎、念台(劉宗周、一五七八一六四五)、梨洲(黄宗羲、一六一〇一六九〇)は清議を主持し、之が為に冤を訟す。張紹秋輩は鄭と素より徳怨無く、但だ風聞に拠り復た核実ならず。顧寧人(顧炎武、一六一三一六八二)も亦た復た人の言を聴き、詩を作りて譏刺す。因りて『鄭案伝信録』を作り以て其の真を存す」と。朱石君(朱珪、南崖・盤陀老人・大興相国・文正)は狷庵尊人の門下士為り、其の石君並びに柬令兄竹君(朱筠、美叔・笥河、一七三〇一七八二)に答ふるの詩に「^醜儒審行蔵、尤欲慎語黙。匪徒競浮名、斂華就其実。惜哉天山翁、登朝大鸞直。一斥不少挫、抵掌奸相側。奸相詎相容、力奮含沙惑。大獄突然興、厚誣伏波蕙。党惡漸盈廷、奚啻虎而翼。遂令服上刑、肢解同恠醜。当時尽骨驚、異代猶心盡。可怪汲古家、罕能得要樞」と云ふ有り。亦た崋陽の事を為り而して発す。著はす所の『頼古斎詩文』は、張宛鄰が之が為に校刊す、其の女夫なり。

福本雅一氏に、「鄭鄭の獄」(二玄社『明末清初二集』所収)と題するこの事件についての詳細な論述がある。その末尾に付された鄭鄭資料には、

湯修業『鄭鄭事蹟』五卷(『古学彙刊』第一集雜記類)

卷一『天山自訂年譜』/卷二『扶倫信史』/卷三『漁樵鄭鄭本末』

第四・小説『放鄭小史』『大英雄伝』／第五・湯修業『鄭峯陽冤獄弁』

湯修業「鄭峯陽冤獄弁一卷」(『甲戌叢編』) 弁一・弁二・弁三・弁四・弁五

「峯陽公冤案仁信録序」湯修業

の二つが上がっているが、原文の湯修業撰「鄭峯陽庶常冤獄辨一卷」はこれらを指そう。

11の文章は、黄莘田(名は任、十硯先生、福建永福の人、康熙壬午の举人)が祖父の黄文煥(字は維章、号は坤五、一五九五—一六六四)について述べたものである。

〔黄莘田〕又云く「我が祖中允公、著述は匹儔鮮し。劫灰し半ば磨滅し、什に一のみ先疇を遺す」と。〔莘田の祖中允公、曾て山陽に令す。中允の文集は皆淮上の諸公の梓る所なるも、遺集は未だ刊せざる者尚ほ多し。中允の蔵書処は『環翠楼』と曰ふ。黄石斎先生は党禍を以て同に詔獄に下り、石斎の中允に貽る詩に「心は怨み無きを知るべく、途窮するも未だ倒行せず。陰晴れなば小鳥に随ひ、毒痛まば共に蒼生たり。故事もて開眼を経、人を留めて点睛を別つ。江河終日計へ、豈に澄清せざる有らんや」と云ふ。又一章ありて「癩遜清嘯する無く、通途に雅春を得。旧冠誰か度に合ひ、扁带容るを為すが若し。国に蹙り元兎を看、師に遊び赤松を恣ままにす。驚心は一事に非ず、旦晩に又た秋蛩あり」と云ふ。〕

原文の「黄石斎先生は党禍を以て同に詔獄に下り」とは、『明史』卷二五五「黄道周伝」に、「(崇禎十三年)帝遂に怒りを発し、立ちどころに二人(黄道周・解学龍)の籍を削り、刑部の獄に逮下し、責むるに党邪乱政を以てし、並びに八十を杖し、党与を究む。詞連編修の黄文煥・吏部主事の陳天定・工部司務の董養河・中書舎人の文震亨、並びに獄に繋がる」とあるを指す。また『明清江蘇文人年表』一六四〇年の項には、『明詩紀事』辛籤・卷一八を引き、「福建の黄文煥、山陽県知県自り翰林院編修に内任し、黄道周の案に牽連するを以て獄に下り、獄中に在りて『楚辞聴直』八卷・『陶詩析義』二卷・『楮留集』一卷を著す」とある。しかし「中允に貽る詩」は『黄漳浦集』に見出だせない。

つづいて4の一文は閻若璩の父、閻修齡が黄道周の門人であったことと、明朝滅亡後は遺民となり張養重や靳応昇と交わって詩名を挙げたことが記されている。

閻百詩の先世は太原県の西寨邨に居す。六世の祖始めて山陽に遷り、故に晩れて『爾雅』（釈丘）に「晋有潜邱」の語を取り以て自号す。父は修齡、字は再彭、号は牛叟。少くして黄石齋に師事し、平生慎しんで檢持し、詩を以て江淮の間に名あり。甲申、諸生を棄つ。張虞山養重・靳茶坡応昇と嘗て同に「秋心詩」を作る。虞山は為に「丹荔老人伝」を作る。母は丁、名は仙竊、字は少姜、亦た詩を能くし、自ら讀書処に題して『兌閣』と曰ふ。兌を以て少女と為し、己は女兄弟中に於て行は最少なり。

閻若璩（名は若璩、字は百詩、太原の人、一六三六〜一七〇四）の父、閻修齡については、『碑伝集』卷一二五・逸民下之上に「淮陰（今の淮安）処士閻君牛叟なる者有り、名は修齡、字は再彭、今の隱君子なり。性は端凝方正にして、苟しくも言笑せず。少くして挙子の業を攻め、經史に博綜たり。時に漳海の石齋黄公、清徳積学たり、蔚さかんに儒宗為り、又方に直声を以て天下を震はす。君輒ち往きて之に師事す。甲申の変（一六四四年）に遭ひ、諸生を棄て、耕釣を以て自ら蔽ふ。張虞山養重（名は養重、字は虞山、山陽の人、一六二〇〜一六八〇）・靳茶坡応昇（名は応昇、字は茶坡、山陽の人、一六〇五〜）と善く、嘗て同に「秋心詩」を作る。…虞山為に伝を作る」（王宏撰「閻処士修齡伝」とある。若い頃、科挙の試験に志し、經学や史学を広く治め、黄道周に会いに行き師と仰いだ。そして明朝滅亡後は、遺民となって詩を作った。張養重や靳応昇と詩作に励んだ点については、『明清江蘇文人年表』一六四七年の項に「山陽の靳応昇・閻修齡・張養重等は此の頃里に在りて『望社』を結び、此の年『秋心集』を合刻す」（『望社姓氏考』）、一六五一年の項に「山陽の閻修齡・張養重、京口に遊び、養重は『秋舫詩』を作る」（『古調堂集』下）とある。また一六七二年の項には「山陽の閻修齡蔵する所の古画を鬻ぎ、張養重の北遊に資す」（同前）とある。

（II）明朝崩壊前後（甲申の変）

1の文章には、徐汧・徐枋父子の話が見える。徐汧（一五九七〜一六四五）の字は九一、号は勿齋、諡号は文靖、長洲の人。崇禎元年（一六二八）に進士となり、庶吉士に改められ、同三年、中允の黄道周が錢龍錫（字は稚文、号は機山、華亭の人）を救おうとして官を貶され、倪元璐が謫を代わることをお願い出るが許されず、徐汧は上疏して道周・元璐の賢を頌し

た。その後、福王に召されて少詹事となり、南京が落城すると、書を書いて二人の子を戒め、虎丘の新塘橋に身を投げて死んだ(『明史』巻二六七)。黄道周に「寄徐勿齋諸兄」一章戊寅(『黄漳浦集』巻四十二)、「将出都姚孟長前輩・楊用賓・徐九一・呉澹人・馬君常(世奇)・張天如(溥)諸館丈各有惠詩依韻間和八章」(同巻四十六)などの詩がある。徐枋(号は侯齋、一六三二〜一六九四)は、『清史稿』巻五〇一(遺逸二)に「字は昭法、長洲の人。父汧は、明の少詹事、国難に殉じ、事は『明史』に具はる。枋は、崇禎壬午(一六四二年)の挙人。汧の国に殉ずるの時(乙酉・一六四五年)、枋は死に従はんと欲す、汧曰く『吾れ以て死せざるべからず、若ぢ長ずれば、農夫と為りて以て世に歿するも可なり』と。是れ自り山中に遁跡し、布衣草履もて、終身城市に入らじ。靈巖山に遊ぶに及んで、其の曠遠を愛し、澗上に卜して之に居し、焉に老ゆ。枋と宣城の沈壽民・嘉興の巢鳴盛、『海内の三遺民』と称せらる。枋の書は孫過庭を法とし、画は巨然を宗とし、間ま倪(雲林)・黄(公望)を法とし、泰餘山人と自署す」とあり、この『清史稿』と原文の前半文はほぼ同一の内容である。徐枋の書跡は非常に貴重で、人は「枋の文章書画は天下に妙たり、時人は重金を以て之を購ひ、一筆も落つるを肯んぜず」(『中国書法鑑賞大辞典』一〇九八頁)と称したという。原文の「先人」は徐汧を、「藐孤」は弱小な孤児である徐枋自身を指す。「斤斤」は『詩経』周頌・執競(武王の強く頭われた功烈を祭る詩)に「斤斤其明」とあり、功德の盛んに頭われ輝くことをいう。この一文には、徐枋が父徐汧の遺言を守って四十年間も山中に隠れ住み(康熙年間に七十三才で卒した)、黄道周や陳子龍(臥子)からの福建での反清起義の参加を断り、遺民として生きる道を選んだことが語られている。断った理由は、徐汧が明朝に忠節を尽くしたからその子の自分も同じ道を選ぶよう勧められるが、利害を超越したところにこそ功德が盛んになると考えたからである。徐汧・黄道周・陳子龍といった明朝に忠節を尽くして死を選んだ生き方とは対称的な、遺民を選択した徐枋の人生観が描かれている。

2の一文は、徐宏沢・徐柏齡・徐燦心の三代みな詩画を善くしたという話である。

徐処士宏沢は詩画を以て名あり。万曆中(一五七二〜一六一九)、李少卿日華・陳徵士繼儒の声と相い埒し。『竹浪齋集』有り。子の柏齡(字は)節之は、崇禎三年(一六三〇)の挙人。座右(房官)は黄石齋為り。石齋は言事を以て罪を獲、出でて杭州に至り、大滌山を愛す。精舎を治め、書を著はし学を講ず。甲申(一六四四)以後、忠節は則ち慈

谿の劉振之・錢塘の姚希允、経術は則ち海寧の袁朝瑛・仁和の孟心春・餘姚の何瑞図、書法は則ち嘉興の汪挺あり。節之は詩画を以て其の間に頡頏す。石斎贈るに詩を以て云く「節之我に貽るの詩、十章大いに清脱なり」と。石斎国に殉じ、節之師訓を乗り、始終其の節を渝へず、其の子の燦心と、三世皆な詩画を善くし、論者は以て難しと為せり。

徐宏沢の字は潤卿、号は春門、自号は竹浪老人、嘉興の人。北京市中国書店発行の『中国画家大辞典』（原名『中国画家人名大辞典』神州国光社・一九三八年八月版影印）に、「徐宏沢、書は姚綬と頡頏し、画は李日華・陳繼儒と相い埒し」とある。李日華（一五六五～一六三五）の字は君実、号は六研斎、嘉興の人。陳繼儒（一五五八～一六三九）の字は仲醇、号は眉公、華亭の人。ともに明代の著名な文人。徐柏齡の字は節之・節菴、徐宏沢の子で永嘉儒学教諭となり（『静志居詩話』卷十九）、著に『畊硯田斎筆記』がある（『中国画家大辞典』）。徐燦心（字は青螺）は、徐柏齡の子で花鳥画を善くした（同前）。慈谿の人劉振之（字は而強）は、崇禎十四年（一六四二）の十二月、李自成が許州城を陥落させても屈せず、四肢を切り離されて死んだ（『静志居詩話』卷二十）。錢塘の人姚希允（希胤、字は有僕）は、順治三年（一六四六）の五月、唐王に召された郭維経（字は六修、江西龍泉の人）とともに兵を八千人募って贛州に入り、楊廷麟・萬元吉と協力して守ったが、城が破壊されると維経とともに焼け死んだ（『明史』卷二七八）。黄道周に「答姚有僕書」（『黄漳浦集』卷十九）、「姚有僕箴」（同卷二十八）などがある。海寧の袁朝瑛、仁和の孟心春、餘姚の何瑞図はともに未詳。ただし汪挺（字は無上、号は爾陶、嘉興の人）については、『国朝書人輯略』卷一に「明崇禎の進士、書は率更（歐陽詢）の小楷に以、尤だ工みなり」とあり、黄道周の「大滌書院記」（『黄漳浦集』卷二十四）に「嘉興の汪爾陶挺」なる人物が記されることから、汪挺は崇禎十一年（一六三八）の冬、倪先春・錢林・曹振龍・陳子龍とともに黄道周に出会っており、黄道周の門人と思われる。このほか「題汪爾陶所藏謝思忠画卷」（同卷三十八）、「書示汪爾陶」（同前）などもある。『黄漳浦集』には徐柏齡に関する詩として「金華舟中同徐節菴賦得陰愧主人五章缺二首」（同卷四十一）、「吳江舟中酬徐節之三章」（同卷四十二）があるが、原文が引く「節之貽我詩、十章大清脱」の句は、「別節之兼慰諸友」（同卷三十七・五言古詩）の25・26句目に見える。

牽舟出湖口、南風正清発。楚客欲泝江、懸眼射帆末。松陵忽已過、咫尺吳門達。梅尉不可求、梁鸞亦超忽。自顧形

影間、汎汎成何物。手持雪堂詩、但為嘆奇趣。英年已感慨、吾老安足惜。憶昔十年游、胥濤兵衝突。買舟入包山、坐探林屋窟。相知三四人、各已落白髮。揺漾獨吾存、又当弔賈屈。黯然問精靈、母乃喜勃率。節之貽我詩、十章大清脫。…

黄道周の本文の行動を裏付ける史料として、莊起儔編『漳浦黄先生年譜』に「崇禎三年、夏四月、至都。未幾、與科臣熊德陽同出典浙江鄉試。…是時督臣袁崇煥以誘殺毛文龍抵罪、詞連舊輔錢龍易、併逮詔獄」、「崇禎五年、是秋至餘杭（杭州）、諸同人畢業、因築書院於大滌山」とある。科擧の時代、受験生（考生）と試験官、即ち座主（房官）との関係は、終身切っても切れない強い絆で結ばれており、徐柏齡は黄道周を終生の師として仰いだ。この一文はその徐柏齡が、明朝に忠節を尽くすという師の遺訓を守り、宏沢・柏齡・燦心と徐氏三代ともに詩画に秀でたことを物語っている。とはいえ陳子龍のような忠節を尽くして死を選んだ生き方とはやはり対称的な、文人として遺民を選択した徐柏齡の生き方が描かれている。

8の「福藩」とは、一六四四年到北京で崇禎帝が自殺した後、南都の南京で福王の子朱由崧が即位して継いだ南明王朝を言う。南都が滅ぶと、ついで唐王の朱聿鍵（唐藩）が福州で即位し、黄道周は少保兼太子太師吏部尚書武英殿大学士になったが、唐王は海賊出身の「鄭芝龍」の武力を頼りにしたため、政権は鄭氏に帰っていた。よって鄭氏は黄道周の上位に位し、衆議は鄭氏を抑えようとしたができず、文武がこれにより不和となった。沈天目が、鄭芝龍の擁兵跋扈するのを抑えきれず、漳浦令を劾せられ罷め去ることになった背景には、鄭芝龍と黄道周の不和が起因している。沈天目は「名は兆昌、字は聞大、浙江海寧の人」（謝正光編『明遺民伝記索引』）であり、「清朝に大理寺評事を以て徴さるるも、起らず、老圃堂を築き終に焉に隠す」とあるように、明朝崩壊後は遺民として余生を送った人である。黄道周が沈天目に贈った詩は、『黄漳浦集』巻四十七「答沈聞大依其來韻二章」其二に見え、『電橋詩話』が引く原文と若干文字に異同がある（傍点の字）ので、『黄漳浦集』の方を引いておく。

嬾石愚谿各小山、但無之艸媿商顔。幾行鳥跡沙田外、一幅漁蓑風雨間。
世道自隨人變化、野花聊與竹爛斑。不堪垂老看新秬、頼爾巾車數往還。

詩中の「商顔」は地名で今は商原という。一説に山の名、陝西省大荔県の北を指す。

(III) 清朝初期(順治・康熙・雍正・乾隆)

14の一文は黄道周の入室の弟子、洪思についての記述である。

龍溪の洪阿士、名は思、黄石齋先生の高弟なり。先生、征を招き志しを遂ぐるに、阿士乃ち雞犬を移し竹川に入る。『洪凶十二書』を著し、以て其の子に誨ふるに、人間の事有るを知らざるなり。晩年稍客として四方に授け、石齋の遺文を収む。康熙甲申(二七〇四)八月、漳の行窩に卒し、門人喪を紫雲山に執り、各詩を為り以て之を哀しめり。林子牛の竹川を哀しむ二章に云く「堅きこと虚谷にあらずんば非ず、其れ道の未だ行かざるが如し。蓬頭五十載、匿跡孤城に半ばす。老い至りて心仍ほ苦しみ、時危ふきも志し益明かなり。憐れむべし涙死するの日、猶ほ注ぎて奮騷成るがごときを」、「已矣かな斯の文喪び、千行涙禁ぜず。書を著はし典籍を遺し、孤塚人琴を碎く。薇蕨は猶ほ古へに終り、衣冠は今に復すること無し。西台に雲正に暮れ、誰か続けん楚歌の音を」と。嘗て苦竹山に博濟祠を建て、以て石齋を祀る。子牛の遯亡詩に、其の「半生跡を匿し、一に洪凶に意さす。志の尚き所、師門に負かざる」を称す。著に『石秋子録』有り、故に又た洪石秋と称さる。

陳衍『福建通志列伝選』卷六(台湾文献叢刊第一九五種)には「洪思、字は浩士、龍溪の人。父は榜、字は尊光、黄道周に従ひ遊び、思は父に随ひ同に業を受く。道周、難に江寧(南京)に殉し、思は父と偕山中に隠れ、道士の冠服を為し、足跡城市に入らず。道周の著述甚だ富むも、兵燹もて散失し、十に存するは二三のみ。思、遺書を収輯し、之を遠近の士大夫の家に求め、五十年に垂として遺書始めて全し。思の講学は、存誠主敬を以て本と為し、致知力行を要と為す。嘗て其の師の学は『易』に在りて行ひは『孝経』に在るを念ひ、遂に黄子の『易』と『孝経』とを述べ、之を『洪凶』と謂ふ。総じて十二部目、敬身より始まり、皆救世の書為るなり。思、山沢中に匿れ、時に或ひは小舢を刺して鄴山に詣で、石齋の講堂を訪る。釣台に上り、乃ち歌を放ち、歌ひて竟に慟哭す。有司、其の人を重んじ、常に造り訪るも、皆之を避けて見ず。」とある。また孫静庵の『明遺民録』卷二にも「明の洪思、字は阿士、龍溪の人。年十

三にして、父に随ひて黄道周の門に遊び、容止は甚だ飭にして、道周之を器とせり。道周既に歿し、身を敬み山に逃れ、城市に入らず、詩歌自ら放つ。時に舟を買ひ江東を過ぎり、鄴山に登り、道周の墓を撫で哭して去る」とある。

5の一文に見える「詒晋齋」は永瑄（清の宗室高宗乾隆帝の第十一子、号は少厂・鏡泉、一七五二—一八二三）の齋号で、乾隆中に成親王に封ぜられ、書に精通し、劉墉・翁方綱・鉄保と並び清中期の四大書家と称され、「帖学派」の一家として著名な人物である。黄石齋の「周中丞を弔ふの詩」は『黄漳浦集』に見当たらないが、「周中丞棺至不及走問入漳值已建祠致拜肅然四章」（同卷三十九）という五律詩、「周忠愍公墓誌銘」（同卷二十七）があり、「周中丞」は即ち東林七君子の一人、周起元を指そう。『三易洞璣』十六卷は、三易（伏羲易・文王易・孔子易）によって天文曆数を測ろうとして、崇禎二年（一六二九）に黄道周が書き上げた書物である。『四庫全書』に収録されている（『四庫全書総目提要』卷一〇八・子部術数類参照）。「山に還る詩」と「前緩声歌」は『黄漳浦集』に見当たらない。

芒屨野店に風塵繞り、絶学孤忠共に身を致す。輔嗣経を談ずるも後輩無く、景純命を推すは竟に斯の人。臣心惨惻として屠狗を懐き、国事倉皇として泣麟に到る。友を哭す遺篇厄運に関かり、他時の賈筆亡秦を過ちとす。

これは、成親王永瑄が「黄石齋の周中丞を弔ふ詩卷」を読み、周中丞と黄道周の二人の忠義の士を弔った詩であるが、大意はおおよそ次のようになるう。

わらぐつを履き玉皇大帝の廟を訪れると、野原にある店に風塵がまつわり吹き、学問はとびぬけて優れかつただ一人頑張って忠節を尽した周中丞と黄道周は、ともに君主に身命を捧げた。明末の崇禎帝に仕える大臣たちは経学を論じるも、それを奉じる後継者はおらず、黄道周が晋の郭璞（字は景純）のように曆数を推し究めたのは、結局この人周中丞であった。臣下は犬殺しのような卑賤の業に従事する心を抱いて痛み悲しみ、一国の政治はあわてふためだけで、異民族の清に社稷を侵入され、明の聖人は涙を流すにいたった。黄道周は友人の周中丞を弔った文章によって、災難に遭うめぐりあわせとなったが、それはかつて前漢の賈誼が、六国が秦に滅ぼされたこと、秦が仁義を修めないで国を滅ぼすに至ったことを述べて秦の過失を批判した『過秦論』を著し、長沙王の太傅に左遷させられたのと同じである。

友人周起元を思慕した黄道周、その二人を「絶学孤忠共に身を致す」と評する成親王永瑄という構図になるが、『雪橋

『詩話』はこれらをまるごと思慕し評しているように思われる。

(IV) 清朝中期(嘉慶・道光)

宣宗(道光帝)召対し、「誠実不欺」及び「公正忠誠」の褒有り。漳浦黄忠端の従ひて東廡に祀らるは、公(姚石甫)の奏請する所なり。(姚)石甫は其の平生、大節凜然たるを称し、朝望し之を壁立すること千仞に比す。惠潮を觀察するの時、蓋し嘗て其の幕中に在り。

この19の文章の言わんとするところは、姚石甫が黄道周の「大節凜然たるを称し」と言うことであろう。姚石甫(名は瑩)は安徽省桐城の人で、嘉慶十三年(一八〇八)の進士、福建平和の知県を授けられた。その治世は「閩中第一」と称せられ(『清史稿』卷三八四)、道光帝に信任された(『統碑伝集』卷三五「道光朝司」)。清代古文一派「桐城派」の、従祖に当る姚鼐に師事し、文章は善く論を持ち、時事利害を陳述し、慷慨は深切であったという(『清史稿』卷三八四)。桐城派の開祖方苞(一六六八―一七四九)にも「跋石斎黄公手札」(『方望溪全集』卷五)・「石斎黄公逸事」(同卷九)など、黄道周に関する記述が見られる。なお17の文章中の「黄石斎と喬柘田(名は可聘、字は君徴)は天啓壬戌(一六二二)の同年の進士、石斎の柘田に与ふる手簡は称して年兄と為す」は、「跋石斎黄公手札」の冒頭に言う「公の宝応の喬侍御(可聘)に与ふる手札十有四」のうちのどれかを指すと思われるが、残念ながら『黄漳浦集』には見当たらない。

清朝中期の嘉慶・道光年間において、少なくとも「桐城派」一派の人々の中では、黄道周は「大節凜然」の人として仰がれていたと考えられる。

四 黄道周と夫人蔡玉卿の書法をめぐって

前節では時代順に黄道周像を追いかけてきたが、次に3・10・13の黄道周の書法についての文章と、7・18の夫人蔡玉卿の書法についての文章に焦点を当て、書法芸術という視点から黄道周像を考えてみることにする。

先ず3の一文からは、黄道周の墨跡がその没後直ぐ、明の遺民として生きた人々にいかに崇拜されていたかが分かる。黄道周と同時代の人で、遺民として生きた陸圻は、明朝に忠節を尽くした倪鴻宝（名は元璐、一五九三～一六四四）、陳木叔（名は函燾、一五九〇～一六四六）、黄石齋三家の墨跡を『孤忠遺翰』として収蔵した。そしてその子の陸寅が、時の大学者王源にその序文「孤忠遺翰の序」を依頼したことが記されている。

王崑繩の「孤忠遺翰の序」に云く、「武林（杭州）の陸鯤庭先生は、乙酉（一六四五年）に難に死す。書を留め其の母及び兄弟に辞す。其の兄の麗京先生、一時の南北の難に殉ぜし倪鴻宝、陳木叔、黄石齋が如き諸君子の平昔に往還せり書牘・贈答詩・古文を集め、裝潢して巻を成し、而して其の書を後に附し、題して『孤忠遺翰之を蔵す』と曰ふ。後に麗京先生も亦た遂に家を棄て、長く往きて返らず、其の子の寅は之を尋ねること十余年なるも遇ふを得ず。丙寅（一六八六年）の夏、寅は源に京師に遇ひ、其の巻を出だして源に示し、源をして之が為に序せしむ」と。

王源（字は崑繩、北京の人、一六四八～一七二〇）は顔元の門人である。『清史稿』卷四八〇（儒林一）に本伝がある。陸鯤庭先生（名は培）は、庚辰（一六四〇年）の進士で、父は陸運昌。『南疆釋史』卷十七に伝がある。陸圻（一六一四～？）は麗京先生と呼ばれた陸培の兄で、嘉定の黄淳耀・長洲の尤侗らと常熟で『臨社』に参加した。末弟の陸培は梯霞先生と呼ばれる。陸寅（字は冠周）は陸培の子である。

7の文章は夫人蔡玉卿の書『心経』百巻と『雑花画冊』について語られている。

公、戍に在りて、蔡玉卿夫人石潤は嘗て『心経』百巻を写く。難に臨むに及んで、夫人書を寄せ勉むるに致命遂志を以てす。没後、家人其の小冊を得、自ら丙戌（一六四六年）、年六十二に終ると謂ふ、始めて其の能く知り来れるを信ず。夫人の『雑花画冊』は、崇禎丙子（一六三六年）に作る。正に公、家に居り民為りしの時なり。未だ幾もせず、召されて中允に復す。花卉十種、工緻生動たり。每幅に四言の題句有り、末款に云く、「石道人、石潤蔡氏に命じて写かしむ」と。字は端勁にして、婦人に類せず。石耕唐氏（名は俊）に蔵され、後に小山堂趙氏（名は昱）に帰す。乾隆己巳（一七四九年）、柘坡（即ち方光泰）、梁文莊の清勤堂に于て観ゆ。

また18の文章の割り注にも、

夫人の蔡潤石玉卿、先生師を督して杉関を出づるの時に当り、札を致して云く「古へ自り忠貞、内顧に煩はず、身後の事、玉卿之を凶らん」と。善き書なり。先生に代はりて行草を作り、幾んど真を奪ふ。嘗て偕かな北上し舟中に『衛夫人帖』を臨す。人争ふに匹錦を以て之を購ふ、然して皆石斎の名を署す。晩年乃ち或ひは自ら署すとあり、夫人の蔡玉卿の人と為り、黄道周の書に匹敵するほどの実力があつたことが述べられている。

10は黄道周の書そのものに対する貴重な見解と言える。

〔吳孟拳〕嘗て黄石斎の書法は中品に入らず、獄中に写く所の『孝経』は、道緊整肅にして、忠孝の氣鬱然たり、真の天地の至宝なりと謂ふ。「石斎の真蹟の在るを臧弃し、書法に縁よらずして流伝す」の句有り。

吳之振（字は孟拳、号は橙斎・黄葉村農、浙江石門の人、一六四〇～一七二七）は、「詩古文辞は俱ともに工にして、書画芸事は天授有るが如し」（『清代学者象伝』第一集第一冊）と称され、一六七一年に呂留良・吳自牧らと『宋詩鈔』を刊行したことは有名である。文学史上、清代の詩人には尊唐派と宗宋派の二派があり、清初の黄宗羲・呂留良・吳之振・陳評らは宋詩を提唱した。黄道周没後直ぐのその書法に対するこの短い評語は、黄道周の真蹟が伝来するのは、その芸術性の高さからではなく、人品の高さからであると言う。

13は、宗源瀚（字は湘文、上元の人、一八三四～一八九七）が、倪鴻宝・黄石斎・瞿稼軒（名は式耜、字は伯略・起田、号は稼軒、江蘇常熟の人、一五九〇～一六五〇）というこれまた明に忠節を尽くした「三忠の墨蹟」を収集した話である。3の陳木叔が瞿稼軒に変わったものだが、倪鴻宝と黄石斎は共通している。それだけ、清末においても、黄道周は非常に高く評されていたと言えるであろう。宗源瀚は地理に精通しただけでなく、書室を頤情館といい、『金石書画題跋』『名賢碑伝録』等も著した文人でもある。

宗湘文：勝国の「三忠の墨蹟」、倪鴻宝の手札二通、：黄石斎の泥金箋の行楷一通、瞿稼軒の手札一通を蔵有す。孫琴西太僕題して云く「積牆標運那なぞ能く支へん、人物瑰奇にして尚ほ思ふ可し。慟哭俊厨猶ほ論を抗あかふがごとく、崎嶇梁益已に時に非ず。百年の喬木哀鳳を遺し、十幅の明珠睡驪を摘む。太息元成漢業を肩になひ、幾人か籍を温め経師と号す」と。秦澹如（名は細業、字は応華、澹如は号）は、為に七古一首を賦し、高伯平（名は均儒、浙江秀水の人、一

八二二(一八九六)・馮鉄華(名は誉驥、字は叔良、鉄華は号)に各題句有り。

孫衣言(字は劭聞、号は琴西、浙江瑞安の人、?~一八九〇)は道光三十年(一八五〇)の進士で、太僕寺卿に官し、著に『遜学齋詩文鈔』『甌海軼聞』がある(『碑伝集補』卷七)。

五 小結

小論では明末清初の文人黄道周に焦点を当て、黄道周という人物を『雪橋詩話』がどのように記述(引用を含む)しているかを検討した。その結果、第一節で述べた『雪橋詩話』の第三点目の特色「明代の遺民の作品が大量に記載されている点」について、一部ではあるが、黄道周を通じて、明代の遺民の作品を記載していることが確かであることが判明した。また「清末民国初の文芸界における黄道周像」は13などの文章によって部分的に垣間見れたように思う。しかし、「辛亥革命以後、暗に清朝遺老としての政治思想を堅持する態度を宣揚するために、どのように明代遺民の事跡に借りたかの点」については解決できぬままであった。この点については今後さらに検討を加えていきたい。

(注)

- 1 北京古籍出版社本『雪橋詩話』所収の石継昌氏の出版説明、同『雪橋詩話三集』所収の出版説明、および同『雪橋詩話余集』所収の出版説明による。
- 2 筆者はこれまでに黄道周を研究テーマとして、「明末文人交友考―徐霞客と黄道周」(『筑波中国文化論叢』9・一九八八)、「東林から復社へ―詞臣黄道周をめぐる」(『中国文化』一九八九・漢文學會會報47)、「(訳注)黄道周の理学思想」(『日本橋女学館短期大学紀要』3・一九八九)、「黄道周の書論」(『中国文化』一九九〇・漢文學會會報48)、「陳子龍の變貌―師黄道周との會いをめぐって」(『調布日本文化』創刊号・一九九一)を執筆してきた。小論はこれらの研究の延長線上にある。
- 3 「冶春絶句」十二首を指すと記したが、四部叢刊本『漁洋山人精華録』卷五に収録される「冶春絶句十二首」中には、「白嶽黄

山岡逸氏」の詩句が見当らない。ただし、詩題の割り注に、「同林茂之前輩、杜于皇、孫豹人、張祖望、程穆倩、孫無言、許力臣師六、修稷紅橋、酒間賦治春詩」とあり、王士禎がこの「治春詩」を連作した折に、程穆倩と孫無言がその場（修稷を行った場）に居合わせたことは確かである。しかし厳密には、現時点ではこの詩句の出処は不明と言わざるを得ない。さらに待考を要す。

（付記）

本論文は、平成五年度文部省科学研究費補助金（奨励研究A）「明末清初の文人交友研究―黄道周を中心として―」（研究代表者河内利治）の成果の一部である。